

続

徒然  
つれづれ

## 知的好奇心

桑野 巍

夕暮れ時の公園の緑歩道を歩く。頭に浮かんだのは「自分はいまどこで生かされてるのか」だった。自分の存在を自らが確かめている場面だ。もしかしてこれは哲学的な発想かなと思ったりもするがそれはどうでもよい。足を止めて公園の公衆トイレを借りたあと「私って単純な動物」を感じとり、「いまどこで生かされているか」の疑問には「大阪という所で」という答しかできないのだから模範回答とは言えないことがわかった。

それでは自分が生かされているコストはいくら位か、人の一生のコストはいくらかかるのか、社会生活とのかかわりはどうか、と自問自答してみるが全て答はアバウトそのもので考えるのがばかばかしくなってしまった。「もの思秋」の現象といえは格好よいが、働き盛りの人たちから見れば「何と平和ボケしたおっさん」としか映らないだろう。

「お前は自然や自分以外の人たちに感謝したことがあるか。一人で生きているという考え方は大間違い」と忠告してくれたのは中学高校の同級生の医学博士の言葉。彼は森羅万象に感謝しているかどうかを問い続けることが健康に通じると教えてくれる。そして、肉体と精神がパラレルで衰えてゆくのが人間でこれが理想とつけ加えた。「またお前に説教された」と思いつつも、親友の言葉はありがたかったことを散歩中に思い出した。

現実に帰ると、私は毎朝五時過ぎに目覚める。朝刊の活字を拾い読む。なぜか「ああでもない。こうでもない」という雑意見がかけ巡るから“毎日凡人”を意識する。昔取った杵柄きねづかが災いして「活字メディアもカッカしているな」「記者のへっぴり腰」を感じるから、まだ現役の習慣らしきものが抜け切っていないことを実感する。子ども虐待などの社会現象、想定外の事件事故の記事に出食わずと「何でや」の虫が飛び出してきて感情をおさえ切れない。

政治の世界でも①政治不信はなぜ起こるのか②政

治家の理念とは、彼らの潜在能力とは③平和外交とは④次々起こる問題に全力投球しているのか⑤国、地方とも議員は多過ぎないか—の感情が走る。政治問題だけでなく経済や国際問題にも興味を抱くが、一個人の情報収集能力には限界ありと感じつつも、新聞読みに時間をかけてしまう。

在京の大学教授（メディア論専攻）が最近の学生の情報収集方法について「彼らは安い、早い、生の情報をインターネットで検索していて実に上手。ぼくには一種の魔力に映る」といっていた。昔は図書館へ行って入念に調べていたから隔世の感があるということか。テクノロジーの進化は恐ろしいというべきか。今時の学生は捕球が上手で、情報をナイスキャッチ、大人が案じる必要はないということらしい。

ところが眼科医から文明の利器使用を禁止されている私は情報過疎状態で、世の中の早い流れについて行けず、焦りや不安が付きまとう。速読理解能力の低さ、知識の未熟さ、単純発想という悪い癖が出るのだから情けない。いまさら委縮したり、反省してみても始まらないと諦めるべきか。「知るほどに知らざることの多かりき」と思うべきか。「逢魔が時」を迎えようとしている身つらは辛い。

そこへ九月という敬老月間を前に100歳以上の超高齢者の所在不明問題が起きた。問題の本質はともかく、長寿大国なのに「どうして。なぜ」が持ち上がってきた。思いついたのは①孤独と縁者の関係②希薄化した地域社会や家族の絆③住民基本台帳や住民票とは何④福祉行政とくに民生委員の仕事の困難さ⑤個人情報保護の壁—などを指摘したくなった。そして今秋の国勢調査は大丈夫かという心配が持ち上がると同時に健全な知的好奇心がいやが上にも強くなってきた。

（自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長）